

新春対談



市長 新しい年を迎えましたが、間垣親方から宮城野親方へ、そして宮城野部屋を継承して師匠へ、昨年は大きな転換期を迎えた年でした。

親方 体重62キログラムで入門し、「もやし」と呼ばれた少年が、宮城野部屋師匠になりました。責任があることと強く感じています。

20年間、涙と汗を流したこの宮城野部屋を受け継いだことは、本当に感慨深いものがあります。

師匠として、力士たちと生活をともにし、より一層、弟子たちに頑張ってもらいたいという気持ちが強くなり、親心が芽生えたような気がします。

秋場所では、所属力士が序ノ口優勝から序二段に上がったこともあり、師匠として良いスタートを切れたと思います。

おおさき宝大使の元横綱 白鵬関で、宮城野部屋 師匠 宮城野翔さんと伊藤市長が、大崎市との縁や夢について、語り合いました。



市長 宮城野部屋を継承することになり、さらに親しみや期待感が増しています。

親方 東日本大震災が発生した平成23年3月11日は、私の26歳の誕生日でした。復興支援活動として、大崎市に被災地慰問したことをきっかけに、おおさき宝大使に就任し、大崎市民の皆さんと交流を続けてきました。震災に対する復興を支援したいという強い思いがありましたので、被災地に土俵を寄贈する活動なども行ってきました。

大崎市の皆さんとも、これまで以上に、交流を深めたいという思いがあります。大崎市で新弟子を見つけ、関取に育ててみたい、という思いもあります。

市長 親方や宮城野部屋の皆さんに、大崎市の魅力を感じていただけましたか。

親方 大崎市を訪れた際は、皆さんから温かいおもてなしをしていただきました。何となく温かい感じがしました。心も温めてくれますね。家族でも訪れたので、たくさんのお誘いがありました。関取を育てて一緒に大崎市の皆さん



んに、また会いに行きたいと思っています。

市長 現役の時に、横綱白鵬関の全勝優勝の優勝額を、大崎市民病院とあ・ら・伊達な道の駅に、寄贈していただきました。市民病院は、5年連続で黒字経営、平成29年度には、機能評価係数Ⅱ市町村立病院で、ランキング1位となりました。道の駅も、雑誌の「満足度の高い道の駅」として、全国道の駅グランプリで、2年連続1位に輝きました。働く人の励みになっていいると思います。

親方 道の駅に訪問した時に、優勝額の前でピアノを弾いていた方が、「横綱に見られながら良い緊張感の中で、良い演奏ができました」と、

SNSでおっしゃっていて、市民の皆さんに、なじんで愛されているんだな、と感じました。

全勝優勝16回のうち、2枚が大崎市にあるということ、とても感慨深いですね。

市長 親方や宮城野部屋の力士の皆さんからの、震災からの復興やまちづくりへの支援は、子どもたちに夢を与え、相撲がより身近になりました。師匠として、どのような弟子、力士を育てていきたいとお考えですか。

親方 鳥取城北高校出身の落合哲也君が、幕下15枚目格付け出しで入門することになり、力士20人、行司、呼出、床山を含め、20人強の大部屋状態



になりました。

力士は、死ぬまでちょんまげを付けたまま生きていく、と決意し入門します。私自身ができることを、言葉で指導することは難しいですが、一日でも早く関取に育て、大関、横綱に育てていきたい。それが宮城野部屋への、一つの恩返しにもなるのかな、と思います。

自分の好きな言葉は、「型をもって型にこだわらない」。型も何もないのに、いろいろなやろうとするなという意味で、この言葉がとても好きです。「たくさんの技を持っていく」というのは響きは良いかもしれないけれど、少しも怖くはない。なぜなら、技が全部中途半端になるから。それよりも、一つの型を持っている人が怖かったですね。元大関魁皇さんが良い例ですね。相手の右上手を取った瞬間、会場が歓声で湧いていた。そのような力士を育ててみたいですね。それと、昔ながらの力持ちで優しい「お相撲さん」。

日本が戦後の貧しかった中、元横綱 双葉山や元横綱 鏡里など、ハングリー精神で強くなった力士たちがいました。今の若い衆にもハングリー精神で、「自らお願いしま

す！という精神で頑張ってください」と、声をかけています。

市長 親方はいつも揮毫される時、「夢」という文字を使いますね。どういう思いで、夢という文字を揮毫されているのですか。

親方 モンゴルの親父が、モンゴル相撲の横綱で、約10年間現役で活躍していました。メキシコオリンピックで、モンゴル初の銀メダルを獲得しました。メダルの色は銀だったのですが、金に近い銀だったと思います。そんな親父を夢見ずと頑張ってきたんですね。親父の影響は大きいですね。

日本には夢を抱いてやって来ましたが、デビュー場所は負け越してしまいました。横綱になりたいという夢が、自分の中で遠くなりましたね。でも、「親子相撲」というのがモンゴル相撲にも大相撲にもあって、国は違いますが、やっぱり夢は諦められない、と思います。

の経験から思っています。

市長 若い力士の皆さんが、夢を実現し、歴史に残る功績を持つ親方の教えを受けて、たくさんの夢を実現できればと思います。

親方 の出身は、モンゴル国ですが、2022年は、日本とモンゴル国が外交関係を樹立して、50周年を迎えました。日本とモンゴル国の交流の懸け橋としても、親方に期待したいですね。

親方 モンゴル高校の会長をしている幼なじみと話した時に、1990年代は、日本とモンゴル国の交流がアジアで最も深かった、と言っていました。

私の故郷は、モンゴル国ウランバートルですが、日本や大崎市との、人と人との交流に加え、技術や農業などの分野でも、これからもっと交流できたらと思います。

市長 日本の相撲とともに、日本とモンゴル国の交流も発展させていきたいですね。現役の時から開催している「白鵬杯」は、世界中の子どもたちに、相撲を知るきっかけになったと思います。



市長 大崎市は、国内だけではなく、国外からも認められる都市にしたいと計画しており、その施策の一つに、日本語学校の開設を考えています。次の世代を担う子どもたちに、夢と元気を与える未来となるよう期待し、この縁を、永いものにしたいですね。